



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

所謂「イ落ち構文」の構造について

著者	清水 泰行
雑誌名	日本文藝研究
巻	71
号	2
ページ	1-21
発行年	2020-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029016

所謂「イ落ち構文」の構造について

清水 泰 行

1. はじめに

本稿では、「熱っ!」「うまっ!」のような「イ落ち構文⁽¹⁾」について、先行研究（今野 2012, 清水 2015, 今野 2017）で提案されている統語構造を取り上げて、それぞれの比較検討を行い、形容詞の一部として分析できるガ格、形容詞語幹の性質（体言性）などについて論じる。

清水（2015）は「イ落ち構文」の統語構造について、「感動の対象」を表す「主語」をとるかからないかという点に着目し、この点で対立する笹井（2005, 2006）と今野（2012）を取り上げて考察し、部分的に今野（2012）の批判を展開している。それは、「これ、うまっ!」の「これ」のような要素について、構造上の「主語」とする今野（2012）の分析に問題（原理上および応用上とされるものがそれぞれ二つ⁽²⁾）があり、「主語」とすることは妥当ではないとしたことによる。その後、清水（2015）に対して今野（2012）にはなかった新たな視点を取り入れた、今野（2017）が発

(1) 「イ落ち構文」は今野（2012）の用語であり、清水（2015）の用語ではない。清水（2015）は「熱っ!」のような形式を「形容詞語幹が声門閉鎖を伴って発話され、感動の意味が表現上実現する文」と規定し、「形容詞語幹型感動文」と呼んでいる。本稿では、便宜上今野（2017）の用語で統一する。

(2) 原理上の問題としては、構造上の「主語」であることを示す直接的な議論を行っていないこと、形容詞語幹が「AP」（形容詞句）の主要部であるとしていること、応用上の問題としては、「主語」を想定できない「イ落ち構文」があること、「イ落ち構文」を連続して発話する用例が説明できないことが挙げられている（清水 2015: 126-128）。この二つの応用上の問題については、4 節で議論する。

表された。この論文は全編を通じて、清水（2015）を批判する形で書かれている。本稿では、清水（2015）に対する今野（2017）の反論を踏まえて議論を発展させたい。

以下では、今野（2017）によって指摘された、「イ落ち構文」が「主語」を持つことを示すとされる新たな四つの言語事実と、今野（2017）による清水（2015）に対する批判を中心に論じる。次の2節では、先行研究（今野 2012, 清水 2015, 今野 2017）の分析の比較検討を行い、今野（2017）に従うと、今野（2012）にはなかった問題が生じることを述べる。3節では、清水（2015）を批判するために今野（2017）が指摘した四つの言語事実を再検討し、これらの言語事実が三者のうちのいずれかの分析を支持する、あるいは支持しないというようなものではないことを示す。4節では、清水（2015）の挙げた二つの言語事実（応用上の問題とされるもの）が、今野（2012）および今野（2017）の分析の問題とはならないとする今野（2017）の検討が不十分であり、反論できていないことを述べる。5節では、今野（2017）によると妥当性を欠くとされる清水（2015）の分析を再検討するとともに、「イ落ち構文」が体言性を持つことについて新たな言語事実をもとに考察する。

2. 先行研究とその問題点

この節では、「イ落ち構文」を統語構造の観点から分析している先行研究として今野（2012）、清水（2015）、今野（2017）を取り上げ比較した上で、今野（2017）の清水（2015）に対する批判について、方法上および分析上の問題があることを指摘する。

2.1 形容詞句分析と名詞句分析と小節分析の比較

今野（2012）、清水（2015）、今野（2017）はそれぞれ異なる統語構造を仮定している。

- (1) a. [AP [*埋め込み] (主語名詞句) 形容詞語幹 [+声門閉鎖]] (今野 2012)
 b. ([NP 「感動の対象」]) [NP 形容詞語幹 [+声門閉鎖]] (清水 2015)
 c. [SC [*埋め込み] (主語名詞句) / *pro* 形容詞語幹 [+声門閉鎖]] (今野 2017)

(1 a) の今野 (2012) は形容詞語幹を形容詞と見做し, AP (形容詞句) であるとするが (以後「形容詞句分析」と呼ぶ), (1 b) の清水 (2015) は形容詞語幹が AP の主要部であるという (1 a) の分析の問題点を指摘した上で, 形容詞語幹を体言化形式と分析し, NP (名詞句) であるとする (以後「名詞句分析」と呼ぶ)。(1 c) の今野 (2017) は, 清水 (2015) による問題点の指摘を受けて, 形容詞語幹が SC (小節) の備える「主語－述語構造」における述語であるという前提のもと, AP を SC というように修正した (以後「小節分析」と呼ぶ)⁽³⁾。

三者の分析では, 「主語」の扱いの違いが注目される。形容詞句分析と小節分析は「主語」(省略可能)を認めるのに対して, 名詞句分析は形容詞句分析の「主語」は「感動の対象」の提示句であるとし, 認めない。「主語」を認める二者の分析のうち, 小節分析は, 「うまっ」のような形容詞語幹のみのものに省略された「主語」としての空代名詞 (*pro*) を新たに想定する点で形容詞句分析とは異なる。また, 文の機能について, 「表出」の内実に違いが見られる⁽⁴⁾。今野 (2012) と今野 (2017) は感覚

(3) 本稿と今野 (2017) の用語の相違を注意しておく。今野 (2017) は今野 (2012) の分析を「小節分析」, 清水 (2015) の分析を「名詞化分析」と呼んでいる。本稿では統語範疇に着目していることにより, 「名詞化分析」ではなく名詞句分析と呼ぶ。なお, 清水 (2015: 135) では, 感動文として機能するとされる形容詞語幹について, 「単純な体言ではなく, 体言性と形容詞が本来表す属性が一体化した, 感動表出の場面でのみ現れる体言化形式 (nominalization) と分析する」と述べられている。

(4) 「表出」という用語について, 本稿ではカール・ビューラーに従って使っているが, 今野 (2012, 2017) では意味する範囲が異なるようである。カール・ビューラーの言語理論は, 佐久間 (1941) において日本語の文の分析に用いられ, 「表出」「うったへ」「演述」の三類型が示されている。

や判断の表出であるとし、清水（2015）は感動の表出であるとする。「イ落ち構文」は、今野（2012）と今野（2017）によると、「主語－述語構造」を備えている点で山田文法における「述体句」に位置付けられるとされているが、清水（2015）によると、体言化形式で表出される点で山田文法における「喚体句」に位置付けられる。それぞれの分析を比較すると、表 1 のようにまとめることができる。

表 1 先行研究の分析の比較

本稿における名称	統語構造	形容詞語幹	主語	文の機能
形容詞句分析（今野 2012）	形容詞句 (1 a)	形容詞	○（省略可能）	感覚や判断の表出 （述体句）
名詞句分析（清水 2015）	名詞句 (1 b)	体言化形式	×（感動の対象）	感動の表出 （喚体句）
小節分析（今野 2017）	小節 (1 c)	小節の述語	○（ <i>pro</i> を含む）	感覚や判断の表出 （述体句）

検討のはじめとして、今野（2017）の清水（2015）に対する批判の方法に目を向けたい。今野（2017）の分析は今野（2012）の分析に一部修正が施されたものであり、「外心構造」を持つ小節という新しい仮定が持ち出されているという点で方法上問題を含むように思われる。

今野（2017）は、清水（2015）が指摘した今野（2012）の問題点を理解した上で、「清水（2015：126）が指摘するように、形容詞語幹は、「うまい」／「うまさ」という対立が示すように、活用語尾（ママ）によって範疇が決定する。そのため、単純に形容詞語幹が元々形容詞としての範疇素性を備えているとは考えられない可能性がある」（今野 2017：165）とし、これを範疇の問題と捉え、(1 c) のように統語構造を修正することによって問題の一つを回避する⁽⁵⁾。しかし、2.2 節および 3.3 節で述べるように、

(5) 統語構造の修正 (1 c) については、「イ落ち構文を小節が主節として現れたものとみなす今野の分析の主旨に本質的な影響を与えるものではない」（今野 ノ

修正された統語構造は、分析上本質的な影響を与えていると思われるので不適切である。

確かに、小節の構造を形容詞句 (AP) から「外心構造」を持つ SC と修正すると、範疇の問題は回避されるが、問題の本質は範疇ではなく、形容詞語幹の述語性にある。「イ落ち構文」において「活用語尾」が欠落した形容詞語幹は、今野 (2012) の観察した非文となる三つの事実 (「Neg の欠如」「T の欠如」「C の欠如」) が示しているように、統語的な機能・役割を持たないと考えられる (清水 2015: 125-127)。すなわち、形容詞語幹は述語として働いていないということであり、清水 (2015) はそのことを問題としているのである。この問題に触れずには、反論は成り立たないように思われる。

2.2 小節分析に生じる二つの新たな問題

小節分析 (今野 2017) では形容詞句分析 (今野 2012) にはなかった二つの問題が新たに生じているように思われる。

第一に、今野 (2017) は、Stowell (1983) の考え方ではなく Rothstein (2004: 53 f.) を援用しているが、そのことによって外項 (「主語」) と内項 (形容詞の補部) からなる統語構造の詳細が不明になってしまうことである。今野 (2012) は、Stowell (1983) の提案に従って小節を述語の最大投射と仮定している。そのため、形容詞語幹を語彙範疇の形容詞と見做すことで、標準的な句構造規則 (X バージョン) を前提として、最大投射の指定部に外項 (「主語」)、形容詞の補部に内項を仮定することができた。

しかし、今野 (2017) において、範疇の問題を回避するためとして統語構造を SC に修正したことによって、内項の扱いが問題になってくるのではないか。例えば、今野 (2017) は「イ落ち構文」は内項に「自分」を含むことができると指摘しているが (3.2 節で言及する)、「太郎が NP に甘

↘ 2017: 165) と述べられている。

い／厳しい（こと）」のような形容詞文に対する二格名詞句（内項）は形容詞句分析であれば形容詞の補部として AP に含まれるのに対し、小節分析では形容詞語幹が形容詞と見做されないで、内項がどのような形で SC に含まれるのか明らかではない。同様の問題は、「文的慣用句」のガ格名詞句（3.3 節で言及する）についても生じる。したがって、SC における形容詞語幹と内項の関係について考察する必要があると考えられる。このことは、AP から SC への修正が、今野（2017）の分析に本質的な影響を与える問題であることを示している。

第二に、今野（2017）では、「うまっ」のような形容詞語幹のみの形式に省略された「主語」としての空代名詞（「*pro*」）が新たに想定されていることも問題である。長谷川（2010）では、日本語の「空主語（主語の省略、無声化）」の認可に「CP」が関わっているという分析を行っている。長谷川（2010）の分析に従うならば、「SC」のみを備える（つまり、構造的に上位の「NegP」「TP」「CP」は持たない）と仮定する小節分析には、「空主語」は想定できないのではないか。したがって、今野（2017）の言う空代名詞（「*pro*」）については、その性質を明らかにする必要があると考えられる。

3. 四つの言語事実（今野 2017）の再検討

今野（2017）は「イ落ち構文」が「主語」を持つことを示すとされる言語事実を新たに四つ（①「形容詞語幹の項構造」②「再帰代名詞「自分」」③「文的慣用句」④「疑念の可否」）挙げ、それゆえに小節分析を支持し、名詞句分析にとっては問題とならしている。しかし、これらの言語事実は、以下に述べるように、いずれかの分析を支持する、あるいは支持しないというようなものではない。

3.1 「形容詞語幹の項構造」

今野（2017）は、形容詞語幹の項構造について、「形容詞語幹は、形容詞／名詞のいずれとして具現するかに関わらず、外項を持つ」とした上で、次の（2）の例を用いて「B の質問が示すように、「うまい／うまさ」と述べるだけでは、その帰属先が不明なため情報的に不十分である」（今野 2017: 170）という指摘を行い、

（2）a. A: うまいんだよ。 B: 何が？

b. A: うまさがすごいんだよ。 B: 何の？

さらに、「この形容詞語幹を持つ項構造上の性質は、小節分析では主語－述語構造によって満たされるのに対し、名詞化分析では形容詞語幹が統語的に孤立しており構造的には保証されない」（今野 2017: 170）と述べて、小節分析を支持している（形容詞句分析も同様だと考えられる）。

しかし今野（2017）が挙げた例（2）は、「うまい」という形容詞、および「うまさ」という名詞が今野（2017）の言う外項を持つことを示しているに過ぎず、形容詞語幹が外項を持つということの証明にはなっていない。したがって、「形容詞語幹の項構造」についての例は、実際に具現化した形容詞や名詞の問題であって形容詞語幹の項構造を直接示すものではないので、形容詞句分析、名詞句分析、小節分析のいずれかの分析を支持するものではない⁽⁶⁾。

3.2 「再帰代名詞「自分」」

今野（2017）は、「太郎_iが次郎_jに自分_{i/*j}について話した」（Aikawa 1999: 157）という例を挙げて、「先行詞」の解釈に関して「再帰代名詞「自分」」が主語志向性を示すとした上で、次の（3）の例を用いて、

(6) 今野（2012: 5-6, 注1）においては、「イ落ち構文」と通常の形容詞表現との間に「前者が後者から終止形活用語尾を取り去ることで作られるというような派生関係は想定していない」とされ、形容詞語幹と形容詞が別個に扱われている。

(3) a. 先生_i自分_iに甘っ

(http://comic6.2ch.net/test/read.cgi/cchara/1147949456/)

b. かつさん_i人のこと褒めまくって自分_iに厳しっ (°o°;; お若いですよー

(http://wear.jp/haveagoodwearday/7229506/)

「ここでの「自分」は、三人称の「先生」「かつさん」に一致していることから、話者指示詞用法 (logophor) ではなく再帰代名詞用法だといえる」(今野 2017: 171) と述べて、名詞句分析ではなく小節分析によることで「先行詞である主語」と「再帰代名詞」の依存関係を捉えることができるとしている (形容詞句分析も同様だと考えられる)。

しかし、このような説明が可能であるとしても、名詞句分析を批判できているとは言えない。なぜならば、清水 (2015) の立場では、「先生自分に甘っ」「かつさん自分に厳しっ」における「先生」「かつさん」については「感動の対象」の提示部であると分析できるからである。そして「自分に甘っ」「自分に厳しっ」における「自分」は文中に「先行詞」を持たない用法⁽⁷⁾であり、意味解釈において提示部を参照していると考えられる⁽⁸⁾。また、「先生」といった敬称や「かつさん」といった固有名は呼びかけとし

(7) 文中に「先行詞」のない「自分」の意味解釈については、吉永 (2008) の第 7 章で言及されている。吉永 (2008) は「自分」の本質的な性質を「視点の反射」であるとしている。

(8) 坪本 (2002) は「ト書き連鎖」(ト書きに典型的に見られる「XP-NP 連鎖」) と「自分」の用法が関わっている場合として、次の例 (映画解説文) を挙げている。

(i) ある日、アダムが仕事を終えて帰宅すると、そこには既に“もう 1 人の自分”がいて、家族と共に彼の誕生日を祝っていた。(a) 呆然と立ちすくむアダム。(b) 誰が、何のために・・・そして、なぜ自分が選ばれたのか?

坪本 (2002: 70) は、(b) における「自分」をいわゆる「logophoric の用法」と捉えた上で「ト書き連鎖 (a) によってアダムに注目させ (これは、いわゆる、クローズアップに相当すると言えるが、ト書きの「提示機能」の反映と考えられる)」と述べ、意識主体を導入するという (a) の働きについて指摘している。この例は、(b) における「自分」と (a) との意味的な関連性の観点から、「自分」が文を超えて別の要素を参照しているものとして注目される。

て機能する名詞でもあり⁽⁹⁾、これらの例がそもそも「再帰代名詞」として機能しているのかという問題もある。実際に参照先の URL を確認してみると、(3 a) の「先生」は呼びかけに使用されているという解釈も可能であった（(3 b) については指定のページが存在しなかった）。したがって、「再帰代名詞「自分」」についての例も「形容詞語幹の項構造」の例と同様に、形容詞句分析、名詞句分析、小節分析のいずれかの分析を支持するというものではないように思われる。

3.3 「文的慣用句」

今野（2017）は、「文的慣用句」で形成される「イ落ち構文」として、次の（4）の例を挙げ（今野 2017: 171）、下線部では「文的慣用句」としての意味が保たれていることを指摘している。

（4）a. （昆虫の飼育について書かれたブログ記事）

マット底に産ませたかったので、あえて堅い材を選択したんですが、なんか気合で齧ってる？なので、マットをガサ入れしたのにマットには卵も初令も居ません。。雲行き怪しっ。。

（<http://blogs.yahoo.co.jp/riki8kuwa24/8461312.html>）

b. アイコスすら路上喫煙に抗議が出てるみたいです。愛煙家の肩身狭っ！

（<http://twitcasting.tv/gen1101chan>）

c. （カモの大群の中に1羽だけ白鳥がいる写真へのコメント）

大群すぎて白鳥の肩身狭っ（笑）

（<http://ameblo.jp/rmnktomgrtn/entry-12141504552.html>）

そしてこのような解釈は、名詞句分析ではなく小節分析によってのみ構造的に保証されるとし（今野 2017: 172）、名詞句分析を批判している（形容詞句分析も同様だと考えられる）。しかし、これらの例は名詞句分析

(9) 名詞による呼びかけについては、笹井（2015）、六城（2015）で論じられている。

への反例とはならない。重要なことは、「雲行きが怪しい」「(～の) 肩身が狭い」は全体で慣用句として成立しており、いわば全体で形容詞一語相当の語として機能しているということである。このことを支える言語事実として、インターネット上では、次の(5)のように、「文的慣用句」で形成される「イ落ち構文」がガ格を伴う例を観察することができる(以下、例文に付された下線は筆者によるものである)。名詞句分析では、これらのガ格は語の一部として分析できる⁽¹⁰⁾。

- (5) a. いやあ、さすがに恋人だらけで肩身が狭っと思ったら、そんな比率は多くなかったですね w
(<https://minkara.carview.co.jp/userid/1078882/blog/39049445/>)
- b. (キャラクターのイラストについてのブログ記事へのコメント)
これから出てくる主人公の肩身が狭っ
(<http://bluenoble0516.blog.fc2.com/?no=239>)
- c. お昼寝無しのお子ちゃま達2人!!!!!!さすがに毎日お昼寝する love 娘っこちゃんは夕方あたりから雲行きが怪しっ
(<https://ameblo.jp/02170415/entry-11094940462.html>)
- d. 調べていたら、こんなことわざがありました。Idle folks lack no excuses. (怠け者は、言い訳にことかかない) うっ、耳が痛っ!
(http://www.eigokosodate.com/2010/06/post_456.html)
- e. (ファンの言動について書かれたブログ記事)
そのバンドの人のアップされた写真を見せながら「これ見てん!」とその人の眼鏡部分をズーム。レンズに写るは女の人。
「これやつの彼女。脇が甘っ」
(<https://beloveddogs.blog.fc2.com/blog-entry-1351.html>)
- f. (知識をアピールし、自分のすごさを主張する人に対して)

(10) 清水(2015:138, 注23)では「お前の母ちゃん、話が長っ!」という実例が挙げられ、「話が長い」全体で一部の形容詞として機能しており、「話が長っ!」のガ格が語の一部と考えられることが既に指摘されている。

鼻が高っ！超伸びとるわ！

(<https://ameblo.jp/m-oota/entry-12311993003.html>)

したがって、「文的慣用句」についての例も、「形容詞語幹の項構造」「再帰代名詞「自分」」の例と同様に、今野（2017）でも清水（2015）でも「慣用句解釈を受ける事実を構造的に捉える」ことが可能であると言える。

ただし、「文的慣用句」についての例は、むしろ小節分析に問題を与えるように思われる。例えば、「雲行き」と「怪しい」で「文的慣用句」が形成される場合、その解釈は、前者が後者の投射内に生成されることによって生じると考えられる。しかし、「外心構造」を仮定する小節分析ではこの事実を捉えられない。このことも、2.2 節で述べたように、AP から SC への修正が今野（2017）の分析に本質的な影響を与える問題であることを示している。

さらに、形容詞句分析や小節分析では「文的慣用句」のガ格名詞句をどのように説明するのか疑問が残る。名詞句分析では、岸本（2014）を援用することで、「文的慣用句」のガ格名詞句についての議論を補うことができるように思われる。岸本（2014）は、「名詞＋ない」の形式を持つ複雑形容詞が「ない」との結合度によって、（少なくとも）三つのクラスに分類可能であるとしている⁽¹¹⁾。そのうち、クラスⅡの形容詞の場合、名詞にガ格が現れても現れなくても名詞が「ない」に編入されること（すなわ

(11) 「名詞＋ない」型形容詞の三つのクラスについては、次のような具体例が挙げられている（岸本 2014: 42）。

(i) クラスⅠ：揺るぎ（が^s）ない、危なげ（が^s）ない、あと腐れ（が^s）ない、抜かり（が^s）ない、容赦（が^s）ない、遜色（が^s）ない、当たり障り（が^s）ない、etc.

(ii) クラスⅡ：だらし（が^s）ない、ぎこち（が^s）ない、いたいけ（が^s）ない、たわい（が^s）ない、申し訳（が^s）ない、致し方（が^s）ない、申し分（が^s）ない、おとなげ（が^s）ない、面目（が^s）ない、ふが（が^s）ない、如才（が^s）ない、よんどころ（が^s）ない、突拍子（が^s）ない、忌憚（が^s）ない、仕方（が^s）ない、etc.

(iii) クラスⅢ：しょうがない（しゃあない）、しょうもない、どうしようもない、とてつもない、途方もない、etc.

ち一語化していること), ガ格の「も」への置き換えが可能であることなどが指摘されている。

ここで取り上げている「肩身が狭い」「雲行きが怪しい」「耳が痛い」などは, ガ格を伴わない形式(「肩身狭い」「雲行き怪しい」「耳痛い」)がインターネット上で多く確認でき, 新聞の社説でも使われていること(「安倍政権の経済政策アベノミクスが雲行き怪しい」『中日新聞』2013年6月7日)を考慮すると, 名詞編入が可能であると考えられる。また, 「肩身も狭い」「雲行きも怪しい」「耳も痛い」のように「も」を用いることもできる。これらを踏まえると, 「文的慣用句」のガ格名詞句は, [A 肩身(が)狭い] [A 雲行き(が)怪しい] [A 耳(が)痛い] のように, 形容詞一語相当の語の一部として分析できる⁽¹²⁾。

3.4 「疑念の可否」

今野(2017)は, 「イ落ち構文」では聞き手がその真偽を問うことができるとし, 次の(6)と(7)の対比を用いて「感嘆詞と挨拶表現が命題内容を持たないのに対し, イ落ち構文は命題内容を持つことが示唆される」(今野 2017: 172)という指摘を行い,

(6) A: あっ! / おはよう! B: # 本当?

(7) (同じものを食べている場面で)

A: (これ) うまっ! B: 本当? これおいしくないよ。

続けて, 「小節分析がこの事実を主語－述語構造から直接導くことができるのに対し, 名詞化分析では語用論的に主述関係を読み込むというプロセ

(12) 岸本(2015)を援用して編入を仮定した場合, (5b) のような例は, 「これから出てくる主人公の」という句が用いられている点で, 名詞句分析の反例となり得ることを指摘しておく。名詞の「肩身」が形容詞語幹の「狭」に編入するという分析は, 理論上問題がないと考えられるが, 句が編入されるという分析はそれ自体が独立に議論されるべき問題である。この点については, 「語の内部に句が包み込まれる」という現象, すなわち「句の包摂」(時枝 1950, 影山 1993などを参照)という観点も踏まえて, 今後詳細に検討したい。

スを仮定して当該の事実を間接的に導く必要がある」(今野 2017: 172)と述べて、小節分析を支持するとしている(形容詞句分析も同様だと考えられる)。

しかし、「語用論的に主述関係を読み込むというプロセス」を仮定することが問題であるとし、名詞句分析を批判することはできない。語用論的なプロセスは言語行動の中ではありふれたものであり、ありもしないプロセスを仮定しているわけではないから、語用論的な仮定に問題があるとは考えられないからである。したがって、「疑念の可否」についての例も、「形容詞語幹の項構造」「再帰代名詞「自分」」「文的慣用句」の例と同様に、形容詞句分析、名詞句分析、小節分析のいずれかの分析を支持するというものではない。

4. 二つの言語事実(清水 2015)と説明の妥当性

今野(2017)は、清水(2015)が応用上の問題として挙げた二つの言語事実(「痛っ」を発する際には主語を省略しているとは考えにくいというもの)「主語を伴わないイ落ち表現と伴うものが連続する際、[主語なし→主語あり]の順序の方が[主語あり→主語なし]よりも自然であるというもの」)について、「イ落ち構文」における「主語」の有無とは別の問題であるとしている(今野 2017: 173)。

その上で、清水(2015)による批判との関連で、「イ落ち構文」が「主語」を伴わない場合の「知覚・認識的動機付けおよび語用論的動機付け⁽¹³⁾」に着目し、「うまっ。これうまっ。」のように「主語なし→主語あり」順序の方が逆の順序よりも自然だという傾向、特に先行する発話に主語がないという傾向は、(i)先に述べた知覚上の特性⁽¹⁴⁾により、話者が

(13) 「知覚・認識的動機付け」とは「主語が何か分からないから言わない」というものであり、「語用論的動機付け」とは「主語を言う必要がないから言わない」というものである(今野 2017: 174)。

何かを口にした瞬間に「うまさ」の知覚が口にしたものの認識に先行するということ、(ii) 口にしたものを既に認識している場合であっても、イ落ち構文が非伝達的であるがゆえに、話者が自明の主語に言及する必要があるということのいずれかに動機付けられている」(今野 2017:175)と述べ、清水(2015)の批判が問題とならないとしている。

しかし、今野(2017)は「主語」を仮定しているからこそ、「知覚・認識の動機付けおよび語用論的動機付け」といった観点が必要になってしまうのである。清水(2015)の立場からは、「主語」が存在しないと分析しさえすれば、今野(2017)のような複雑な説明、解釈をする必要はない。以上は、「主語」の有無に対する、清水(2015)と今野(2017)それぞれの説明の妥当性の問題なのだから、「主語の有無とは別個の問題」とすることはできないように思われる。

ただし、今野(2017)の説明に従った場合、「うまっ。これうまっ。」のような例は、(i) うましの知覚が先行したあとで、なぜ「自明の主語」に言及するのか、(ii) 口にしたものを既に認識している場合、自明の「主語」に言及しない発話の後に、なぜ「自明の主語」に言及するのか、という別の問題も生じる⁽¹⁵⁾。そもそも、「イ落ち構文」が「非伝達的」である

(14) 「知覚・認識上の特性」については、先行研究の指摘をもとに、「痛っ」と発話する典型的な場合には、痛む場所の認識よりも痛みの知覚が先行するということである」(今野 2017:174)と述べられている。

(15) 「語用論的動機付け」と「自明の主語」への言及に関わる例を次に挙げる。この例は、「いんこ」(手塚治虫の漫画における天才役者にして泥棒というキャラクター)が「ロベール」という役者を殴り飛ばすという場面について、ブログ記事に書かれたものである。

(i) 殴られたロベールは軽くふつとんで、バーのカウンターの向こう側までいっちゃいます。で、酒ビンをたくさんふつとばしちゃうんです。強っ！！いんこ、強っ！！なんだあんた！！

(<http://nongenreparty.lolipop.jp/nanairo/inkogatari/inkogatari3.html>)

下線部の冒頭の「強っ！！」において、今野(2017)の言う「主語」すなわち「いんこ」は既に認識されていると考えられる。この場合、続く「いんこ、強っ！！」において「自明の主語」である「いんこ」が言及されていることをどのように説明するのかという疑問が生じる。

ならば、なぜ「自明の主語」を言う必要があるのか、いまして説明が必要であるだろう。

5. 名詞句分析の再検討と新たな言語事実

今野（2017）は名詞句分析について、「イ落ち構文の主語が提示機能を持つという仮定」「形容詞語幹を名詞句とする仮定」のどちらにも問題があり妥当ではないとする批判も展開している。

前者については、「アンチョビポテト うまっ！ ってゆか料理全部 うまっ！」という事例を挙げ、「料理全部」という遊離数量詞を伴った名詞句が主語になっている点」（今野 2017: 176）を注意している。そして「提示」について「その場に持ち出して、人にわからせること」（『大辞林（第3版）』）とした上で、「直示的解釈」が可能な「これ」は「提示的文脈」において単独で用いることができる⁽¹⁶⁾のに対し、「料理全部」は同様の「提示的文脈」において単独で用いることができないこと（「（完成した料理を見せながら）*ほら、料理全部。」）、「これ」が常に「提示機能」を担うわけではないこと⁽¹⁷⁾などから、名詞句分析について「主語に与えている提示性に関する指定は不要だといえる」（今野 2017: 177）としている。

しかし、今野（2017）の挙げた「料理全部 うまっ！」における「料理全部」は、提示性を持つと考えられる。なぜならば、この「料理全部」は、例えば「食べた料理全部」「出てきた料理全部」のように数量が特定されているものであり、聞き手が発話の場にいることによって正確に理解がで

(16) 「提示機能」を持つ「これ」については、「A：嬉しそうな顔してどうしたの？ B：（合格通知を見せながら）ほら、これ。」という例が挙げられている（今野 2017: 176）。

(17) 今野（2017）は、「提示機能」を持たない「これ」について「通勤途上で、紅葉が始まる直前の木々の緑が鮮やかな青空に映えるのを眺め、思わず「これは綺麗だ」と独りごちたのはわずか半月ほど前のことですが」という事例を挙げ、「（仮想上のものも含めた）相手を必要としない独話においても「これ」は出現可能である」（今野 2017: 177）と説明している。

きる直示的なものと考えられるからである⁽¹⁸⁾。すなわち、この「料理全部」における「全部」は「遊離数量詞」として働いていないのである。

後者については、「名詞化分析の要であるイ落ち構文の形容詞語幹が名詞化されているという仮定は、形容詞語幹が一般に体言資格を持つという仮説（永野 1951⁽¹⁹⁾）以外の根拠を持たない」（今野 2017: 177）と述べ、「イ落ち構文」の語幹が名詞化していない事実として、「これ（*の）うまっ。」「これ（*の）うまい。」「これのうまいこと／これのうまさ」「イワンのばかっ。」という例を挙げて名詞句分析を批判している。しかし、清水（2015）は形容詞語幹を純粹な「名詞」と言っているのではなく、体言性を持つものと捉えているのであり（注3も参照）、以下で示すように、形容詞語幹が一般に持つ体言性は「イ落ち構文」においても見られると考えられるのである。まず、次のような形容詞語幹の持つ様々な用法を確認しておく⁽²⁰⁾。

（8）a. 高が知れる、高の知れたもの（だ）、高を括る、高で括る

b. 長（永）の{|暇／旅路／別れ|}、妖しのセレス（渡瀬悠宇の漫画）、いとしのエリー（サザンオールスターズの曲）、美ノ国（う

(18) 「料理全部」の提示性についての実例を次に挙げておく。

(i) これだけ飲み食いして、5000円ちょっと。安っ！しかも、料理全部、旨っ！天ぶら最高！（<https://ameblo.jp/uspmaker/entry-12215208228.html>）

この例での「料理全部」とは、話し手（ブログ記事の作者）が居酒屋で食べたもの（具体的には「とり皮ボン酢」「鶏から揚げタルタル」「天ぶら」「板わさバター炒め」「激辛もやし」）を指している。聞き手（ブログ記事の読者）に、「旨っ！」というように心が動いた対象がこれらの「料理全部」であることを伝えようとしていると考えられる。なお、提示性を持つことを直示的であると見做すことについては自明ではないため、今後詳細に検討したい。

(19) 永野（1951）は、形容動詞語幹を体言として扱うという時枝文法の立場から、形容詞語幹についても同様に体言として扱うという考えを述べたものである。

(20) 形容詞語幹の体言性について、例えば飯豊（1973）では「語幹がそのまま名詞として用いられることがある」とされ、「丸と四角とを書く。」「わか（若）をよんで来い。」「そうとうのわる（悪）だね。」などの例が挙げられている（「やす（安）」「たか（高）」などの人名についての言及もなされている）。その他にも、「格助詞「の」が付いて連体修飾語となる」ものとして、「あか（赤）の他人」「長の別れ」などの例が挙げられている。

つくしのくに) (日本ハムのギフト), 麗しの宝石ショッピング
(GSTV の宝石専門チャンネル), メリダとおそろしの森 (ディズ
ニー／ピクサーの映画)

- (9) a. お薄 (薄茶), おこわ (お強), お眠, お古, おめでた
b. 激甘, 激うま, 激辛, 激安
- (10) a. 渋 (渋い味) を抜く, ずるを決める (決めこむ), ずる／悪 を
する
b. ズルの知恵本 (門昌央の本), 「ワル」の行動学 (松浪健四郎の
本)
c. これ, ラッシュ時の通勤電車の「暗黙の了解」を公然と破るわけ
で, 下手したら血の雨が降りますし, 残された購入者は「このズ
ルがっ」と言う目で見られて針のむしろですね。
(<https://6408.teacup.com/narashinohara/bbs/6689>)
d. 口の端だけをいじわるくまげて笑う彼が大好き vv このワル
が!!
(<http://nongenreparty.lolipop.jp/nanairo/inkogatari/inkogatari3.html>)
e. 和菓子屋の「若⁽²¹⁾」が, どうしてパティシエの道に?
(<http://www.mitsubishielectric.co.jp/club-me/washoku02/chubuho-kuriku/interview.html>)
f. 冬至の意味を知って「さすが, 関ジャニのかしこ⁽²²⁾」ってモ
モコさんに褒められるヒナちゃん (笑)
(<http://cocoajin0704.blog71.fc2.com/blog-date-20071215.html>)

(21) 形容詞語幹のみで名詞として用いられる「若」について, 今野 (2017: 177) では「転換による名詞用法」とであるとされ, 「うちの若が頑張っていますよー」という実例が挙げられている。

(22) 形容詞「かしこい」の語幹「かしこ」は, いわゆる大阪弁では名詞として使われる。牧村史陽 (編) (1984) 『大阪ことば事典』(講談社学術文庫) の「カシコ【賢】」の項目においては「賢いの語幹だけで名詞としたもの」と説明されている。

- (11) 女性名：あつ（厚・篤・敦・温），きよ（清），しげ（茂・繁・滋，「しげし」の語幹），たか（貴・高），ちか（近），ひろ（広・裕）やす（安），わか（若）

(8) の例では格助詞を伴う点から，(9) の例では接頭辞の「お」や接頭辞的用法の「激」が前接する点から，これらの形容詞語幹が体言資格を持つものと判断できる。(10) と (11) は形容詞語幹のみで名詞とする例である⁽²³⁾。(11) は人名に使われる点で形容詞語幹が名詞として用いられる最も典型的な例であると言える⁽²⁴⁾。このような独立性の高さによって，形容詞語幹は体言（名詞）としての性質を持つと考える。(8～11) で考察したのは形容詞語幹一般が持つと考えられる体言性についてであったが，このような体言性は「イ落ち構文」においても確認されるのであろうか。この確認のため，「なんて」との共起性という観点から，新しい言語事実を示す。

笹井（2006）は感動文である「なんと～だろう！」の形式において，「なんと」は「とても」のような程度副詞とは異なり，「属性概念を持つ語に加えて体言あるいは体言資格の語をも要求する性質を持っている」（笹井 2006：22）ことを係り受けの関係により示している⁽²⁵⁾。本稿で取り上げる「なんて」は，「なんと」のバリエーションの一つであるとされてい

(23) (10 c) における「このズルがつ」および (10 d) における「このワルが！！」は，笹井（2017）の言う「レッテル貼り文」に位置付けられると考えられるが，「が」が下接していることも含め詳細は不明である。なお，ここでの「が」は格助詞ではなく終助詞として機能していると考えられる。格助詞が終助詞のように用いられる言語現象については，莊司（2013）において言及されている。

(24) (11) の女性名は「おきよ（さん）」「おたか（さん）」「おちか（さん）」のように接頭辞の「お」をつけても使われる。なお，二拍の女性名に接頭辞「お」を付ける用法については，角田（1987，新版 2006：189）において「中世（清水注：安土・桃山時代と江戸時代を指す）にはきわめて一般であったし，その名残は現代にもみられる」と述べられている。

(25) 笹井（2006：22）で示された係り受けの関係は次の通りである。

①とても美しい花だろう。②とても美しい__だろう。③*とても__花だろう。
④なんと美しい花だろう。⑤*なんと美しい__だろう。⑥*なんと__花だろう。

る。そして収集した事例（書籍、漫画によるもの）から、「イ落ち構文」が「なんて」と共起したものは観察されないとしている（笹井 2006: 24）。しかし、インターネット上では、次の（12）のような例を多く観察することができる。なお、「なんて」と共起する「イ落ち構文」は、日本語母語話者に見せると不自然と判断されることが多く、特異なものであることを述べておく。ここでは、「なんて」と共起可能であるという点に着目し、その特異性は問題にしない。

（12） a. （『きんのたまごのほん』について）

なななななんて美しっ！と衝動買い。

（<http://bowwowbookshelf.seesaa.net/article/82663339.html>）

b. （ロードレースの隊列で奥さんと仲睦まじくする選手を見て）

なんて羨ましっ！間違った！けしからん w

（<http://blogmichi.blog65.fc2.com/blog-entry-375.html>）

c. （料亭の湯葉料理について）んま～、なんてかわいらしっ！

（<https://ameblo.jp/writerspalette/entry-12131454267.html>）

d. なんて寒っ。

（<https://sakazakidsblog.com/index.php?ID=447>）

e. 正直、最初は目には止まっていませんでしたが間近で見せて頂いて、作業着を甚平というアイテムにしているなんて、なんて渋っっ！！とひかれました。

（<http://kobedays.com/event/remake/2nd#awards>）

f. （テレビドラマ『流れ星』についてのブログ記事へのコメント）

二人がちゃんといい関係でいられたのは今週の頭 15 分ぐらいだし。なんてみじかつ。

（<http://hashimotoriu.cocolog-wbs.com/blog/2010/12/9-cad6.html>）

（12）において「イ落ち構文」が「なんて」と共起するという事実は、「イ落ち構文」においても形容詞語幹が体言性を持つことを示しており、名詞句分析を支持するものと考えられる。

6. おわりに

本稿では、「イ落ち構文」の統語構造を扱っている先行研究（今野 2012, 清水 2015, 今野 2017）を取り上げて、それぞれの分析の再検討を行うとともに、清水（2015）に対する今野（2017）の反論を踏まえて議論を発展させ、今野（2017）において小節分析を支持し名詞句分析を支持しないという証拠が十全に示されておらず、名詞句分析について周到には批判できていないことを述べた。さらに形容詞語幹が体言性を持つことを示す言語事実を指摘した上で、「イ落ち構文」が「なんて」と共起するという事実によって、形容詞語幹が一般に持つと考えられる体言性が「イ落ち構文」においても見られることを確認した。このことは、名詞句分析に、より妥当性があることを示すものと考えられる。

小節分析および形容詞句分析については、そもそも「イ落ち構文」が文であるならば、文としての位置付けが明らかにされていないように思われる。清水（2015）の立場では、「イ落ち構文」はそれが体言化形式で表出されるから、いわゆる叙述文ではなく感動文であると捉えた⁽²⁶⁾。これに対して、今野（2012, 2017）の立場では、「主語－述語構造」を備えているとする点で「イ落ち構文」を感動文とは見做さない。そして「イ落ち構文」は「非伝達の」（今野 2017）であり、「話者が、眼前の事態や対象に対し、瞬間的現在時の直感的な感覚や判断を表出する私的表現行為専用の構文」（今野 2012）とされている。感動文でもなく伝達する文でもないとするれば、これらの文はどのように位置付けられるのか。「イ落ち構文」を小節あるいは形容詞句として捉えることの意味が必ずしも明瞭でないように思われる。

(26) 叙述文および感動文は、山田文法における「述体句」および「感動喚体句」のことを指して言う。

参考文献

- 飯豊毅一（1973）「形容詞・形容動詞の語幹・各活用形の用法」，鈴木一彦・林巨樹（編）『品詞別日本文法講座4 形容詞・形容動詞』 pp.163-206，明治書院。
- 今野弘章（2012）「イ落ち－形と意味のインターフェイスの観点から－」『言語研究』141，pp.5-31.
- 今野弘章（2017）「イ落ち構文における主語の有無」，天野みどり・早瀬尚子（編）『構文の意味と拡がり』 pp.163-182，くろしお出版。
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』 ひつじ書房。
- 佐久間鼎（1941）『日本語の特質』 育英書院。
- 笹井香（2005）「現代語の感動喚体句の構造と形式」『日本文藝研究』 57-2，pp.1-21.
- 笹井香（2006）「現代語の感動文の構造－「なんと」型感動文の構造をめぐって－」『日本語の研究』 2-1，pp.16-31.
- 笹井香（2015）「呼び掛け文」『日本文藝研究』 66-2，pp.13-29.
- 笹井香（2017）「レットル貼り文という文」『日本語の研究』 13-4，pp.18-34.
- 清水泰行（2015）「現代語の形容詞語幹型感動文の構造－「句的体言」の構造と「小節」の構造との対立を中心として－」『言語研究』 148，pp.123-141.
- 荘司育子（2013）「補文化辞「か」と「と」の文法化」『日本語・日本文化』 40，pp.41-53.
- 角田文衛（1987）『日本の女性名－歴史的展望－（中）』 教育社。（上中下3巻を底本とした新版：国書刊行会 2006）
- 坪本篤朗（2002）「モノとコトから見た日英語比較」『国際関係・比較文化研究』 1-1，pp.57-78.
- 時枝誠記（1950）『日本語文法口語篇』 岩波書店。
- 永野賢（1951）「言語過程説における形容詞の取り扱いについて」『国語学』 6，pp.54-64.
- 長谷川信子（2010）「CP 領域からの空主語の認可」，長谷川信子（編）『統語論の新展開と日本語研究－命題を超えて－』 pp.31-65，開拓社。
- 吉永尚（2008）『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』 和泉書院。
- 六城雅章（2015）「名詞による呼掛について－喚体論の視点から－」『日本文藝研究』 67-1，pp.59-78.
- Aikawa, Takako (1999) Reflexives. In Natsuko Tsujimura (ed.) *The handbook of Japanese linguistics*. pp.154-190. Oxford: Blackwell.
- Rothstein, Susan (2004) *Predicates and their Subjects*. Dordrecht: Kluwer.
- Stowell, Tim (1983) Subjects across categories. *The Linguistic Review* 2. pp.285-312.
- （しみず やすゆき・関西学院大学非常勤講師）